建築・まちづくりから生活文化を探求する情報誌［リクシル・アイ］

LIXIL eye

18
FEBRUARY
2019

特集

建築のまちを旅する 06

富岡

製糸場とともにあるまちのこれまでと、これから

FEBRUARY 2019
no.18

LIXIL eye

［リクシル・アイ］

表紙の写真

〈富岡市役所〉行政棟の内観

設計｜隈研吾建築都市設計事務所

「富岡市役所」は行政棟と議会棟の2棟に庁舎が分かれ、行政棟のエントランスホールは3層吹き抜け。1階はエントランスホールのまわりに市民が利用する各種窓口が集まる。吹き抜け内には、これを囲むように1階から3階まで階段を巡らせているが、2階と3階を結ぶ階段は傾斜が緩く、上り下りするときに窓から自然にまちの風景が目に入る

［写真：石田 篤］

左写真

〈富岡市役所〉きびそ壁紙

設計｜隈研吾建築都市設計事務所

蚕が繭をつくるとき、最初に吐き出す糸を「きびそ」という。隈研吾建築都市設計事務所はこの独特の風合いと立体感を活かした壁紙を「富岡市役所」のプロジェクトで群馬県内の会社と開発。行政棟や議会棟のエントランスホールなどに貼った。製糸産業で栄えた富岡を象徴する壁紙であり、地域発の新しい商品だ。写真中央のスチールのフラットバーは手すり

［写真：石田 篤］

LIXIL eye no.18
2019年2月20日発行

発行｜株式会社LIXIL
編集発行人｜早川氏幸
LIXILジャパンカンパニー
TH統括部
〒100-6007
東京都千代田区霞が関3-2-5
霞が関ビルディング7階
Tel: 03-6273-3635
Fax: 03-6273-3742
制作｜株式会社フリックスタジオ
デザイン｜株式会社ラボラトリーズ
印刷｜竹田印刷株式会社

＊本記事の無断転載を禁じます
＊本文中の敬称は省略させていただきました

次号『LIXIL eye』no.19は、
2019年6月発行予定です。

『LIXIL eye』のバックナンバーは
インターネットでご覧いただけます。
http://www.biz-lixil.com/column/lixileye/

CONTENTS

特集

04 **建築のまちを旅する｜06**
富岡

06 **テーマ1**
製糸場とともにあるまちの
これまでと、これから
ナビゲーター｜臼井敬太郎

10 富岡製糸場／上州富岡駅舎／富岡市役所

14 **テーマ2**
絹産業を支えた養蚕施設は
パッシブデザインの先駆けだった

18 富岡建築めぐり

22 **住宅クロスレビュー｜06**
複合住宅
北山 恒・工藤 徹「HYPERMIX」×
駒田剛司・駒田由香「西葛西APARTMENTS-2」

32 **建築家の〈遺作〉｜03**
丹下健三「フジテレビ本社ビル」
談｜丹下憲孝

36 **新世代・事務所訪問｜06**
大室アトリエ／atelier Íchiku
ナビゲーター｜門脇耕三

44 **構造家の新発想｜06**
構造のラストピースを見つける
大野博史

48 **触覚デザイン｜03**
白井晟一のドアハンドル
ナビゲーター｜笠原一人

52 **土木のランドスケープ｜06**
モエレ沼公園
ナビゲーター・文｜八馬 智

58 **Design＋Technique**
ダブルツリー byヒルトン沖縄北谷リゾート

62 **TOPICS**
LIXILのユニバーサルデザイン
文｜ひとみな（UD）プロジェクトチーム

65 **INFORMATION**
LIXILからのご案内／展覧会＋イベント／ LIXIL出版 新刊案内

68 **紙上の建築｜06**
建築としての中景
堀越優希

富岡

特集 建築のまちを旅する 06

群馬県の富岡市。ここに1872（明治5）年、日本で初めて官営の製糸工場が設けられた。
その建物は現在まで残り、周辺の関連施設とともに、世界遺産に登録された。
絹産業における技術革新の歴史を伝える遺構だが、
日本における建築技術の発展の過程を見るうえでも貴重な建物だ。
富岡にはこれにとどまらず、富岡製糸場の先進性を現代に受け継いだ、
新しい建築も次々に生まれている。
世界遺産とあわせて訪れたい富岡の魅力的な建築を紹介していこう。

富岡製糸場の入り口から真正面に見える煉瓦の建物は「東置繭所」。繭の倉庫で、中央アーチの要石に「明治五年」の銘が刻まれている。このアーチを通り抜けると、向かいに並行して「西置繭所」があり、繭を生糸にする「繰糸所」が東・西置繭所の南端に立つ。左手の建物はかつて「検査人館」で、今は事務所棟として使われている
［写真：石田 篤］

テーマ1

製糸場とともにあるまちの これまでと、これから

ナビゲーター｜臼井敬太郎（前橋工科大学工学部建築学科講師）

取材・文｜長井美暁
写真｜石田 篤（特記以外）

「富岡製糸場」は1872（明治5）年、器械製糸場としては世界最大級の生産規模で操業を開始。以来115年にわたり生糸を生産し続け、操業停止後も明治期からの姿をほとんど変えることなく保存管理されてきた。その歴史的な価値が認められ、「富岡製糸場と絹産業遺産群」として世界遺産に登録されたのが2014（平成26）年。この数年前から富岡ではさまざまな計画が動き出し、製糸場最寄りの駅舎や市庁舎などが設計者選定のコンペやプロポーザルから注目を集めて一新。まち並み保全型のまちづくりも市民主体で進む。そんな「製糸場とともにあるまち」を、前橋工科大学工学部建築学科の臼井敬太郎講師と歩いた。

01｜富岡市役所
（隈研吾建築都市設計事務所、2018）
まち並みに合わせて、建物のボリュームが大きく感じられないように分棟かつ雁行の配置とし、片流れの屋根を架けている。広場側の外装には縦ルーバーを設置。関連12ページ

上信電鉄の高崎駅で「富岡製糸場見学往復割引乗車券」を買い、電車に乗り込む。この乗車券は富岡製糸場の見学料込み、写真入りで記念に持ち帰ることができる。改札を通るときは駅員が改札鋏を入れる。そのカチッという音が快い。

約40分で富岡製糸場最寄りの「上州富岡駅」に到着。この駅舎を見ることも旅の目的のひとつだ。駅舎は武井誠＋鍋島千恵／TNAの設計により、2014（平成26）年に生まれ変わった。

ホームに降り立つと早速、製糸場のまちらしい倉庫の風景が駅舎の煉瓦壁の向こうに見える（11ページ参照）。駅舎の煉瓦は黄土色だ。「上州の空は青が深い。黄みがかった煉瓦がそれを際立たせます。富岡の気候風土を測定する“色見本”のようです」と臼井敬太郎講師が話す。「設計者選定のコンペでは製糸場を意識した切妻屋根の応募作品が多かったのですが、これは青空に映えるフラットルーフ。航跡のような白い水平線は、過去と現在、富岡と世界を結ぶ見事な補助線です」。

駅舎はフラットな大屋根の下、大半が半屋外空間だ。そして改札や待合室の床と同じ舗装煉瓦が駅前広場にも使われている。見れば、車道を挟んで向かいの広場や、「富岡市役所」の方向に延びる歩道も同様の仕上げで、照明や看板のデザインも揃っている。管理者がそれぞれ異なる駅・広場・街路が、このようにひと続きの空間としてデザインされているのは全国的にも珍しい。

2018（平成30）年に竣工した新しい「富岡市役所[01]」は、隈研吾建築都市設計事務所が設計した。「市庁舎は、路地が雁行してクランクが多いというまちの輪郭、つまり富岡の人々が身体的に有する感覚を建物にもち込んでいます。そして市民が集える親密なスケールとなるよう、庇の下のデザインに工夫が見られます」と臼井講師。また、「芝生の広場はこの市庁舎のもう一方の主役です。週末にはさまざまなイベントが開かれ、いつも楽しげ。21世紀的な使われ方だと思います」と言う。

市庁舎の2棟の間から駐車場を抜けて製糸場に行くルートがあるが、2018年に竣工したもうひとつの現代建築を見るために、駐車場を出て左折。すぐに、手塚建築研究所が設計を手がけた「富岡商工会議所会館[02]」の北玄関に出る。細長い敷地の片側半分に、細長い建物を寄せて配置し、残り半分は路地だ。表通り側には、この場所に以前から立つ蔵が修復後に保存されている。

富岡製糸場へ誘う門として、蔵の分厚い扉は常に開放されている。それをくぐり抜け、5分も歩けば目的の“富岡1番地”だ。

02｜富岡商工会議所会館
（手塚貴晴＋手塚由比＋矢部啓嗣／手塚建築研究所、2018）
製糸場と駅前の中間地点にある敷地は奥に細長い。表通りに面しては平入りの瓦葺き屋根で、かつてここに立っていた木造の呉服店のイメージを踏襲。奥へと繰り返される山型の屋根と格子状トラスの架構を一体とし、2階床や柱で構成するインナーフレームを組み合わせ、長さ60mの無柱の大空間を実現した。既存の袖蔵は2階をギャラリーとして使えるように修復。1階は平時、敷地内の路地空間において門のような存在だ。関連44–45ページ

官営製糸場がなぜ富岡に？

富岡製糸場の中に入る前に、この地に建設に至った経緯を少し振り返っておこう。まず、明治政府が官営模範工場として製糸場の設立を決めたのは、生糸を主とする蚕糸類が当時、外貨の稼ぎ頭だったからだ。1859（安政6）年以降、通商条約を結んだ国々と貿易するなかで、蚕糸類は輸出総額の約3分の2を占め、群を抜いて多かった。日本にはそのころ、産業らしいものが他になかったこともあるが、ヨーロッパで蚕の病気が蔓延していたことや、生糸の大輸出国だった清（現在の中国）が国内情勢の悪化で生産力を落としていたことも、欧米が日本産の生糸を必要とした理由だ。しかし、需要が高まったことで粗製濫造や偽造、悪徳商法の横行などの問題が起き、ヨーロッパの専門家や商人は解決策を求めて日本の蚕糸業の実態を視察。そのうえで政府に西洋式の器械製糸法の導入、さもなくば外国資本による製糸場の建設を迫った。

このような背景から政府は1870（明治3）年、西洋の設備を備えた官営模範製糸場の設立を決めた。そして外国人を指導者とし、工女（女性従業員）を全国から集め、工女が技術伝習を終えたら出身地に戻し、器械製糸の指導者となることで、それが普及すると考えた。

では、その建設地になぜ富岡が選ばれたのか。現在の群馬県にあたる上州は古くから養蚕が盛んで、江戸期には日本有数の蚕糸地に成長。1869（明治2）年には武州（現在の埼玉県）や信州（現在の長野県）とともに、前述のヨーロッパ人による現況視察を受けている。

官営製糸場の設立を決めた政府は、この視察団の一員で、製糸業に精通するフランス人のポール・ブリュナ[03]を指導責任者として雇用した。ブリュナは製糸場の建設地を決めるため、武州、上州、信州で現地調査を行い、上州の富岡を選んだ。理由は、古くから養蚕が盛んで生糸の原料である良質な繭を確保できる、工場建設に必要な広い土地を用意できる、製糸に必要な水を既存の用水を使って確保できる、蒸気機関の燃料である石炭が近くの高崎で採れる、外国人指導の工場建設に住民が同意、というものだった。

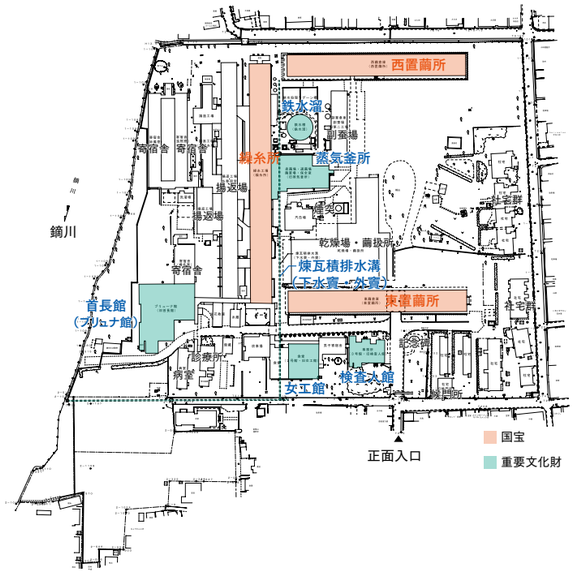
2つめの「広い土地」について少し説明を加えると、製糸場の敷地には約5haが必要とされていた。幕府の直轄領だった富岡には、代官の人事異動で不要になった陣屋の建設予定地が手つかずのまま残り、ブリュナはそれに着目。こうして富岡に官営製糸場が誕生することになった。

群馬の風土から生まれた表情

富岡製糸場の広大な敷地には、細分すると100棟余りの建造物が保存されている。主要なのは最初期に建てられた「繰糸所」「東置繭所」「西置繭所」の国宝3棟だ。いずれも木骨煉瓦造を採用。木造の軸組に壁を煉瓦積みとした構造で、この構造によるこれほど大規模な建物は国内では他に類を見ない。

これらの建物は、フランス人技師のオーギュスト・バスティアン[04]が横須賀製鉄所（のちの横須賀造船所）の設計図を参考に、ブリュナの要請から50日で描き上げた。「造船所のつくりを転用したのは革新的ですよね」と臼井講師。

施工は日本の大工や職人があたり、使う材料は現地調達を原則とした。礎石には富岡の隣の甘楽（かんら）町から切り出した砂岩を使用。木材も富岡周辺の



上｜錦絵「上州富岡製糸場之図」（1876年）
［画：長谷川竹葉、所蔵：富岡市立美術博物館・福沢一郎記念美術館］
左｜富岡製糸場現況平面図（「旧富岡製糸場建造物群調査報告書」2005年7月25日作成より）
［所蔵：富岡市教育委員会］

富岡製糸場の場内図と錦絵
敷地は南北に約300m、東西に約200m、広さは約5.5ha。錦絵で煙突が立つ建物をコの字に囲む煉瓦の建物の手前が「東置繭所」、煙突の建物を挟んで奥に並行して立つのが「西置繭所」、これらをつなぐように左側に立つのが「繰糸所」だ。この3棟が製糸場では最も主要な建物とされ、国宝に指定されている。富岡製糸場には西洋の先進的な設備や製糸技術だけではなく、近代的な働き方も導入された。特に工女の製糸技術の向上にあわせて昇格する等級制度は画期的だった。集団生活や就業規則などになじめず早期退職する工女も多かったが、技術を習得した工女は故郷に戻った後、政府の期待通り、指導者として各地で活躍した

03｜ポール・ブリュナ
フランス出身の生糸検査人（1840–1908）。フランスの生糸貿易商社の生糸検査人として1866（慶応2）年に来日。蚕糸業に関する知識を見込まれ、富岡製糸場の首長（責任者）として日本政府と雇用契約を結び、製糸場建設、製糸器械の導入、フランス人技術者の雇用などを主導。フランス式の繰糸器は日本人の体格に合うように改良したものを注文して取り寄せたという。製糸場の操業後も、繰糸のさまざまな工程の管理・指導にあたった。1875（明治8）年に契約が満了し、翌年帰国。その後も中国・上海での大規模な器械製糸場の設立に携わり、そこを拠点に生糸貿易を行うなど、東アジアとの縁は続いた

04｜オーギュスト・バスティアン
フランス出身の船工兼製図工（1839–1888）。来日後、1865（慶応元）年に開設された木骨煉瓦造の横須賀製鉄所に勤務。横須賀製鉄所は、のちの横須賀造船所で、横須賀海軍工廠を経て、現在は在日米軍横須賀海軍施設

臼井敬太郎講師。東置繭所横にて
［写真：編集室］

左｜国宝の東置繭所。礎石の上に1尺（30.3cm）角の通し柱を立てている。片倉後期に窓にトタンを張ったため、現在のような姿に
中央｜「首長館（ブリュナ館）」はコロニアル様式の建物で、操業開始の翌年に建設された。ブリュナは任期中、ここに家族と暮らした。建物はのちに工女の宿舎や、工女に読み書きや裁縫などを教える学校として利用された。企業内教育の先駆けである
右｜「女工館」は、器械による製糸技術を日本人工女に教えるために雇われたフランス人女性技術者の住居として建てられた。ベランダの天井には板が格子状に組まれ、今も異国情緒がある。また、現在は事務所棟として使われている「検査人館」は、生糸の検査などを担当したフランス人男性技術者の住居として建てられた

05｜原合名会社

江戸時代に生糸や絹織物の商いを始め、明治中期には横浜屈指の生糸売込商だった原商店を前身とする。原家に養子入りした原富太郎（原三渓）が1900（明治33）年、原合名会社に改組。翌年に生糸輸出業を開始し、1902（明治35）年に三井家から富岡製糸場と他3つの製糸場を引き継いだ。のちに同社は原産業株式会社を経て、現在は原貿易株式会社

06｜片倉製糸紡績

創業は1873（明治6）年。片倉市助（初代片倉兼太郎の親）が現在の長野県岡谷市で10人取の座繰製糸を始めたことが発祥。1878（明治11）年に初代片倉兼太郎が洋式器械製糸工場を開設。製糸事業の拡張に伴い、1895（明治28）年に片倉組を設立。事業を継承し、1920（大正9）年に片倉製糸紡績株式会社を設立。1943（昭和18）年、片倉工業株式会社に改称

07｜西置繭所の保存修理・整備活用工事

保存修理工事のための素屋根に付属する形で、見学施設が2019（平成31）年3月末まで設けられている。西置繭所の歴史や保存修理計画の概要、調査解体でわかったことなどを映像とグラフィックパネルで解説する展示とともに、工事の様子をガラス越しに（一部は現場内で）見られる。あわせて、これまで非公開だった重要文化財の「鉄水溜」も見学可能

08｜新井久敏

1956（昭和31）年群馬県生まれ。1979（昭和54）年に群馬県庁入庁。建築確認、営繕、自然環境保全、高崎市出向など建築行政に携わる傍ら、公務とは別に1990年代後半から群馬県内の公共建築の設計コンペやプロポーザルの企画を支援。2016（平成28）年に群馬県を定年退職。現在、全国の自治体や各種団体での設計者選定にかかわる支援を継続中

09｜富岡まち繰るみ舎

同社の代表は「富岡げんき塾」代表の入山寛之氏。富岡げんき塾は1998（平成10）年に商店街後継者の有志が立ち上げ、メンバーを増やしながら活動している。まちで見られる手書き文章の看板はその一環だ

官有林で育った杉や松を使った。

煉瓦は当時の上州にこれを知る人がおらず、埼玉県深谷の瓦職人を呼び寄せ、甘楽町に窯を築き、フランス人技術者の指導のもとで焼き上げた。屋根瓦も同じ窯で焼成。煉瓦積みの目地は、下仁田町で採れる石灰で漆喰をつくり、それをモルタル代わりに用いた。

臼井講師は「繰糸所も倉庫も装飾がなく、架構が丸見えで、超機能主義の建物です。現代建築のミニマリズムに近いところがある一方、地元の材料を使っているから表情が優しい」と話す。「ナショナルな技術や素材がインターナショナルな視点から再編されるというドラマチックなことが、この富岡で起こっていたことに感激します。この表情は群馬の風土からしか生まれ得ないものです」。

製糸場の敷地内は、繰糸所を中心とする生産ゾーンと、その外側の事務・生活ゾーンに大別される。生産ゾーンでは「蒸気釜所」と「鉄水溜」「下水竇および外竇」が重要文化財だ。事務・生活ゾーンでは、外国人指導者の住居だった「首長館（ブリュナ館）」「女工館」「検査人館」の3棟が重要文化財に指定されている。ほかに工女たちの寄宿舎、診療所、民営化後の社宅群などもある。

製糸場は、ブリュナをはじめとする外国人が去った1876（明治9）年以降は日本人だけで操業。1893（明治26）年、器械製糸の普及と技術者の育成という当初の目的は果たされたとして、三井家に払い下げられた。その後、原合名会社[05]への譲渡を経て1939（昭和14）年、日本最大の製糸会社だった片倉製糸紡績[06]（現・片倉工業）に合併した。

実は、民間払い下げの最初の公売で、片倉兼太郎という人物が入札に参加していた。片倉製糸紡績の前身である片倉組の創業者だ。この公売は政府の予定価格との差が大きく、成立しなかった。また、2回目の公売で、三井家に競り負けたうちの1社は兼太郎が実権を握る企業だった。兼太郎は富岡製糸場の近代的な設備や西欧の器械製糸技術、新しい工場制度などに強い憧れがあったといわれる。合併時の片倉製糸紡績社長は三代片倉兼太郎で、富岡製糸場の獲得は片倉家にとって悲願といえるものだった。

保存・補強・活用を連動設計

製糸場は三井・原・片倉の各時代において常に最新の器械を備えたが、主要な建物は壊さずに使われ続けた。さらに、1987（昭和62）年の操業停止後も、片倉工業は「売らない、貸さない、壊さない」の3原則を掲げ、2005（平成17）年に建物を富岡市に寄贈するまで、年間約1億円の維持費をかけて製糸場を守り抜いたという。このため操業当時の姿が健在で、それが世界遺産の登録につながった。

製糸場で現在（2019年1月）、建造物の外観が見学できるエリアは3分の1ほど。敷地全体が国指定史跡であることから、国宝や重要文化財以外の建物も保護が必要で、30年がかりの整備活用計画が立てられている。現在は西置繭所、原料繭を乾燥させていた施設（乾燥場・繭扱所）、数棟ある社宅群のうちの1棟が保存整備工事中だ。

製糸場は創設時の姿を状態良く留める一方、操業停止までの間には製糸技術の進化に伴う変化もあり、敷地や建物にその変遷の跡が刻まれている。西置繭所も同様で、保存修理・整備活用工事[07]は生糸生産の最盛期だった1974（昭和49）年当時の状態に復するという方針のもと進んでいる。

西置繭所の工事で大きな特徴と言えるのが、文化財建造物としての保存修理と耐震補強、公開活用のための整備を同時に行っている点だ。これまでは別々に考えられることが多かった保存・補強・活用の3つを一括で検討し、連動させて設計。その際に、建物の内部に新たな“箱”を設ける「ハウス・イン・ハウス」という手法の導入が決まった。産業遺産の保存活用で先進的な事例が豊富なドイツなどに多く見られる手法だが、日本の文化財建造物では初めて採用される。

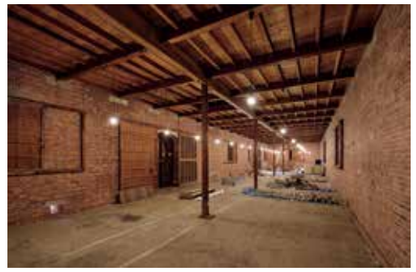
建物の1階は鉄骨フレームとハウス・イン・ハウスのガラス天井によって木造の骨組みを補強する。ガラスハウスにより、空調や人の活動が国宝の建物本体に与える影響を軽減できるという。また、明治初期の施工として貴重であるため、塗り直さずに保存する木摺漆喰塗り天井と漆喰塗り壁が、地震などで大きく剥落したときには来場者や職員を守る役割も担う。2階は主に炭素繊維ブレースを用いて補強。西置繭所は2020年に全工事を終え、公開される予定だ。

製糸場の外で進むまちづくり

富岡製糸場を見たあと、元・群馬県職員の新井久敏氏[08]が合流。新井氏は公務の傍ら、県内の市町村の公共建築のコンペやプロポーザルの企画を数々支援してきた。「平日の夜や休日などのプライベートな時間で手伝ったんですよ」というその数は26件におよび、「上州富岡駅舎」と「富岡市役所」も含まれる。駅周辺の景観形成の旗振り役でもあった。現在は地元富岡のまちづくりを見守る。

製糸場近くの中心市街地には、空き家や空き地が目立つ。それは商店街の低迷だけが理由ではなく、2002（平成14）年からの土地区画整理事業が3年ほどで休止ののち、2013（平成25）年に廃止されたことも一因だ。“ポケットパーク”はその名残だが、イタリア料理店「IL. PINO（イル・ピーノ）」のように、うまく活用している例もある（21ページ参照）。市が事業を廃止したのは、世界遺産にふさわしいまちを目指し、中心市街地に点在する明治期から昭和初期にかけての伝統的な町家建築や蔵などの活用を含む、“保全型”のまちづくり手法に切り替えたからだった。

富岡市の人口は5万人弱の一方、製糸場の入場者数は世界遺産に登録された2014（平成26）年度をピークに、現在は半減したとはいえ年間50–60万人。新井氏は「富岡はもともと観光地ではなく、観光客を迎え入れるのに慣れていない。製糸場が世界遺産になれば、まちが戸惑うことは目に見えていました」と話す。



そこで市民の意識を高めるために、山崎亮氏が率いるstudio-Lの力を借りて2012（平成24）年から3年間、「富岡まちづくり・ひとづくりプロジェクト」を推進。ここから市民活動グループの「スマイルとみおか」が立ち上がった。また、2016（平成28）年に「リノベーションスクール＠富岡」が開催され、2018（平成30）年9月、市内第1号となる家守会社「富岡まち繰るみ舎[09]」が設立。同社によって現在、製糸場近くの築80年の長屋を改修し、いわゆる「まちやど[10]」として開業するプロジェクトが進む。長屋建築は製糸場の開場を発端に多くつくられ、一部がいまも残り、富岡のまち並みの特徴となっている。

「古代遺跡の再発見がルネサンスの呼び水となったローマと、製糸場の世界遺産登録が契機となって新しいまちづくりが進む富岡は似ている」。このようにこれまで語ってきた臼井講師は、「今日は新たに、富岡製糸場が操業時の器械の更新や現在の観光施設としての転用にも難なく対応できているのは、建物がそもそもイノベーティブだからだとわかりました。そのスピリッツを富岡は尊ぶから、気概のある人が集まる。そして富岡の人々はいま、まちづくりを通して皆が乗れる“船”をつくっている。海なし県の製糸場にもち込まれた造船所のスケールの大きさは、まだ見ぬ世界への挑戦を誘います」と言う。

市は駅と市庁舎の間にある「富岡倉庫[11]」を利用し、新たな交流拠点づくりも進めている。かつて世界を目指した製糸場とともに、富岡は大海に乗り出そうとしている。

富岡製糸場 略年表（本特集で紹介した3つの現代建築の動きを含む）

1870（明治3）年
官営模範器械製糸場（富岡製糸場）の建設決定。政府がポール・ブリュナと契約

1871（明治4）年
現在地での建設が始まる

1872（明治5）年
7月、主要な建物が完成。10月、操業開始

1876（明治9）年
前年末の雇用契約満了に伴い、ブリュナ帰国

1893（明治26）年
三井家に払い下げ

1902（明治35）年
原合名会社に譲渡

1938（昭和13）年
株式会社富岡製糸場として独立。片倉製糸紡績株式会社（のちの片倉工業株式会社）に経営を委任

1939（昭和14）年
片倉製糸紡績と合併

1987（昭和62）年
操業停止。以降も片倉工業が建物を大切に保管

2005（平成17）年
片倉工業が富岡市に建物の一切を寄贈

2006（平成18）年
初期の主要な建物が重要文化財に指定

2007（平成19）年
文化庁が「富岡製糸場と絹産業遺産群」を世界遺産の国内候補として暫定リストに記載。駅周辺や新庁舎などさまざまな整備計画が動き出す

2011（平成23）年
「上州富岡駅舎設計提案競技」実施

2012（平成24）年
「富岡市新庁舎建設設計者選定公募型プロポーザル」実施

2014（平成26）年
3月、現「上州富岡駅舎」開業。6月、「富岡製糸場と絹産業遺産群」が世界遺産に登録。12月、繰糸所・東置繭所・西置繭所が国宝に指定

2018年（平成30）年
「富岡市役所」「富岡商工会議所会館」竣工

11｜富岡倉庫

1号（煉瓦積み）、2号（大谷石積み）、3号（土壁）の3棟の倉庫と、繭の乾燥場（木造）からなる。1900（明治33）年に設立された富岡倉庫株式会社が、倉庫営業・倉庫賃貸営業のために建設した。記録によると、蚕糸関係や玄米・石炭などの物資を扱っていたという。同社は10年後に解散したが、同年に同名で再度設立され、2016（平成28）年まで営業を続けたのち、建物が富岡市に譲渡された。市はまちなかへの新たな交流拠点の中核として利活用する考えで、現在進む耐震改修工事の完了後は飲食店や市場、自動繰糸機の展示施設などを設ける予定。中庭を囲んでそれらをコの字型に配置するという。駅から中庭に直接入り、市役所へと続く新たな動線をつくることも検討中だ。また、1号倉庫には群馬県が運営する「世界遺産センター（仮称）」が設置される。明治時代に建てられた乾燥場では現在（2019年1月）、地産地消の食料品店「おかって市場」が営業中。3号倉庫の耐震改修工事が終わり次第、「おかって市場」は3号倉庫に移転する（2019年3月末の見込み）

10｜まちやど

まちやどとは「まちをひとつの宿と見立て、宿泊施設と地域の日常をネットワークさせ、地域全体で宿泊客をもてなすことで、地域の価値を向上していく事業」と「日本まちやど協会」は定義する。同会は2017（平成29）年に設立され、HAGI STUDIO代表の宮崎晃吉氏が理事長を務める

臼井敬太郎　うすい・けいたろう
1976年岡山県生まれ。1999年神戸大学発達科学部卒業。ミラノ工科大学建築学部（イタリア政府給費奨学生）、ローマ・トレ大学マスター建築史コース（ロータリー財団国際親善奨学生）留学を経て、2008年筑波大学大学院博士課程人間総合科学研究科修了。博士（デザイン学）。多摩美術大学助手、西日本工業大学講師を経て、2015年より前橋工科大学工学部建築学科講師。

長井美暁　ながい・みあき
編集者、ライター／山形県出身。日本女子大学家政学部住居学科卒業後、『室内』編集部に所属。2006年よりフリーランス。

MAP 3
16

富岡製糸場

1872年

設計｜オーギュスト・バスティアン（繰糸所・東置繭所・西置繭所）

国宝の3棟は
世界最大規模の木骨煉瓦造建築

国宝に指定された「繰糸所」「東置繭所」「西置繭所」の3棟はいずれも木骨煉瓦造。礎石の上に1尺（30.3cm）角の通し柱を立て、その間に煉瓦を積んでいる。煉瓦はフランス積み、屋根は瓦葺きだ。

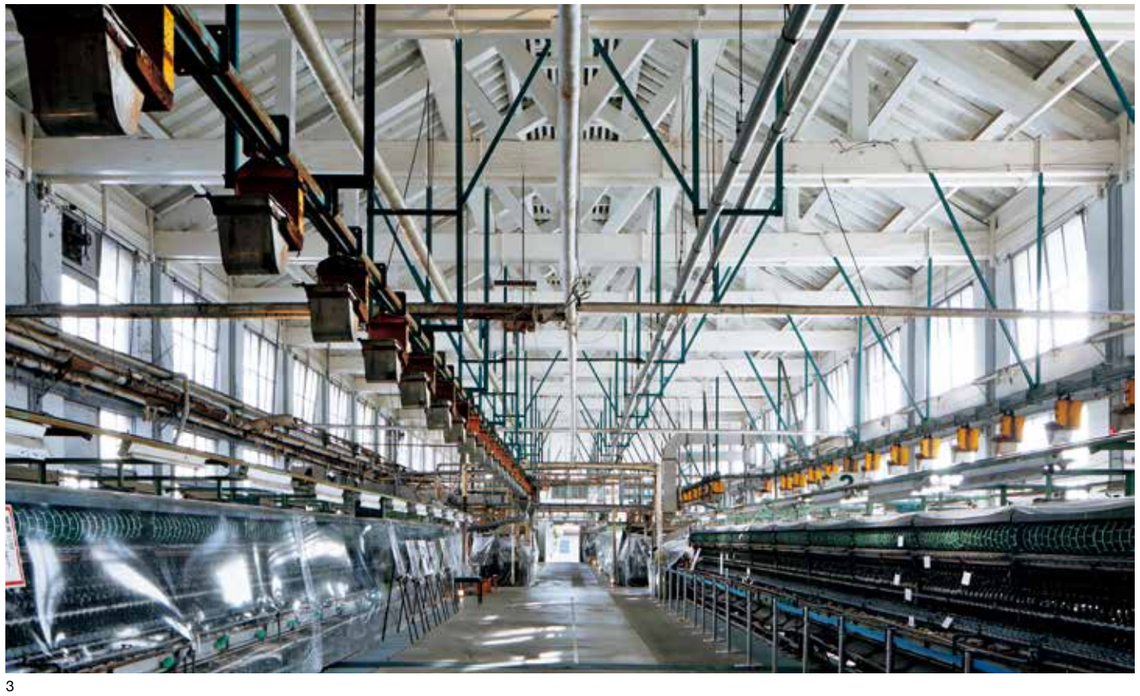
繰糸所は桁行140.4m、梁間12.3m。平屋建てだが軒高は12.1mあり、小屋組にキングポストトラス構造を採用し、中央に柱を立てることなく広い内部空間を実現。創業時はフランス式の繰糸器300釜を設置し、器械製糸工場では世界最大規模を誇った。「中央に柱が立たないのは当時の日本にはない形式ですから、素人目にもモダンな建物に見えたことでしょう」と臼井講師。また、電灯のない時代、壁面は小屋梁までの高さいっぱいにガラス窓を設置して採光を確保。創業にあたりフランスから輸入したガラスが当時のまま残る部分もある。

東・西置繭所は繭の倉庫で、桁行104.4m、梁間は繰糸所と同じ12.3m、軒高14.8mの2階建て。大きな倉庫を建てたのは、創業当初は年に1回、春しか繭をとることができなかったからだ。繰糸所を通年稼働させるために、春にとった繭を貯めておく必要があった。その繭は2階に貯蔵。炭火で乾燥後、貯蔵中も風通しをよくして引き続き乾燥させたため、建物は多数の窓をもつ。のちに乾燥技術が向上すると、窓の外側にトタンを張り、建物自体を密封化した。東西では細部に少し違いがあり、西は1階にアーチがなく、窓の数も異なる。

1

2

1　東置繭所の2階。壁は漆喰塗り。木摺の跡が残ることから、西置繭所と同様に東置繭所の天井と梁も漆喰塗りだったと思われる
2　繰糸所は蒸気を抜くために、切妻屋根の上に越屋根が付く
3　繰糸所の両脇に並ぶ自動繰糸機は、1966（昭和41）年以降に導入されたニッサンHR型。時代とともに機器は更新されたが、建物は創業当初のままだ



3

MAP 3
23

上州富岡駅舎

2014年

設計｜武井 誠＋鍋島千恵／TNA

新しい煉瓦工法で
まちとの一体感ある駅舎

設計コンペには全国から359件の作品が集まり、大いに話題となった。そのなかから選ばれたTNAは、まちの“縁側”のような駅舎を意図し、鉄骨造を主体に軽やかな煉瓦造を実現。木骨煉瓦造の製糸場を意識し、煉瓦を単なる化粧材としてではなく構造体の一部として機能させるために考案した「鉄骨煉瓦積造」は、煉瓦がまとわりついて鉄骨造を支え、煉瓦に足りない部分を鉄骨造が補う、という関係がある。

駅舎は富岡観光の門としての顔をもちつつ、市民に開かれた半屋外空間も創出。煉瓦壁にはベンチやカウンターなどを組み込み、さまざまな奥行きや高さを設定。そこから逆算して煉瓦1個の寸法を決めた。フランス積みを基本に、2列の煉瓦の間にブレースを挟み込んでいるため、その部分は煉瓦の積み方が変わり、ブレースの形がぼんやり浮かび上がる。TNAはこれを「富岡積み」と呼ぶ。

煉瓦が黄みがかっているのは、製糸場の赤い煉瓦との差別化を図り、斜め向かいに立つ「富岡倉庫」の大谷石の色合いを考慮してのこと。床や外構の舗装煉瓦との連続性を出すためであり、凍害に強く吸水率の低い煉瓦を突き詰めた結果でもある。

駅舎の整備を端緒に、駅周辺の道路や広場を含む景観づくりを、行政・民間事業者・設計者・施工者が市民とともに実現したことも特筆される。建築と土木の垣根を取り払い、異なる発注区分や行政区分を調整してデザインを統一し、色や素材、照明など、個別に決められることの多いまちの“仕上げ”が一体的に整備された。

1

2

1　ホームからは「富岡倉庫」の倉庫ごとに異なる3種の素材が、駅舎の煉瓦壁に切り取られて見える。「富岡と出会う“額縁”と言っています」と臼井講師
2　半屋外の交流スペースは、地域の祭などの非日常的な活動の拠点にもなる。新井氏は「駅員も景観に配慮して、待合室以外にはポスターなどを貼らないんです」と話す
3　大屋根は長手方向が約88m、短手方向が約8.6m、高さは約6.9m

3

MAP 3
21

富岡市役所

2018年

設計｜隈研吾建築都市設計事務所

まちの“路地”として存在する市庁舎

敷地が駅と製糸場の中間に位置すること、富岡は歴史あるまちで、クランク状の路地が部分的に残ることから、公募型プロポーザルで選ばれた隈研吾建築都市設計事務所は、ひとつの緩い“路地”として市庁舎を設計。この場所に求心力のある路地をつくり、まちの中に飛び散る路地の断片をつなぎ直すことを試みた。

敷地の駅側は大きな広場として市民に開放。建物は敷地の奥側に配置し、行政棟と議会棟にボリュームを分け、さらにそれぞれを雁行させ、鍵曲がりのような出隅と入隅をたくさんつくった。建物に沿わせるように設けた“路地”は、駅と製糸場を結ぶ動線となる。建物の路地側のファサードは、勾配屋根を架けて庇を出し、縦ルーバーでリズムをつくり、ヒューマンスケールを与えている。

屋根は養蚕農家に見られる越屋根にヒントを得た形状で、中間期に自然換気できるようにした。外装の縦ルーバーや大きく張り出す1階の庇と合わせて、室内の熱負荷の低減を図っている。

内部ではその勾配屋根の裏側を見せ、この地の町家の雰囲気を取り入れた。また、蚕が繭をつくるときに最初に吐き出す「きびそ」を使った壁紙を地域の人たちと開発し、各所に貼っている。きびそは繊維が粗く硬いため製糸には使えず、多くが処分されてきたという。ほかにも藍染めのパーティションや、外装の縦ルーバーには5種類の市産材を混在させるなど、地域の素材を活用。建築と同時に地域産業の活性化も考えられている。

1 行政棟のエントランスホールは3層吹き抜け。両側の壁面に「きびそ」を用いた壁紙を貼っている。吹き抜け周りのガラスの手すりにも、きびそをスキャンした柄をランダムに組み合わせたセラミックプリントを加工。天井裏を開放・露出することで、建物のメンテナンスや変更に利用者が積極的にかかわれる
2 芝生の広場では週末、市民の主催によるマルシェなどの各種イベントが開かれ、多くの人でにぎわう。広場の向かいに「富岡倉庫」があり、その再生プロジェクトの設計も隈研吾建築都市設計事務所が担当。3棟あるうち最初に着工した3号倉庫は木造で、その耐震補強には炭素繊維強化プラスチックによるロッド材を用いる
3 行政棟3階の執務室の奥にあるテラス。誰でも出入りできるオープンスペースとしてのテラスを、建物の外周部にいくつか設けている。縦ルーバーは表裏で素材が違い、片面は木、もう片面はアルミ。木のほうは樹脂を充填した合板でつくり、耐久性を高めた。縦ルーバーの向こうに見えるのが議会棟
4 右手は議場。議会棟の2階にあり、廊下に対して開放的なつくりだ

1

2

3

4

テーマ2

絹産業を支えた養蚕施設はパッシブデザインの先駆けだった

取材・文｜磯 達雄
写真｜小松正樹（特記以外）

1　高山社跡の住居兼蚕室。高山社とは、高山長五郎が開発し、全国標準となっていった養蚕法「清温育」を教える教育機関で、現在、高山社跡に残る住居兼蚕室は、長五郎の娘婿・武十郎が建てたもの。この建物で全国から集まった実習生が養蚕技術を学んだ。内部も見学可能。国指定史跡、世界遺産構成資産（敷地全体）

富岡製糸場の世界文化遺産への登録は「富岡製糸場と絹産業遺産群」としてである。そこには群馬県内に散らばる田島弥平旧宅、高山社跡、荒船風穴の3施設も構成資産として含まれている。これらはいずれも、蚕の生育のために温度や湿度をコントロールする仕組みが建物に取り入れられており、パッシブデザインの先駆けともいえるものだ。富岡製糸場と比べると規模は小さいが、建築的にも興味深い。

1

富岡製糸場から車に乗り、上信越自動車道を介して30分ほど、藤岡市の市街から離れた山の懐に高山社跡はある。立派な長屋門をくぐると、目の前には瓦葺きの屋根に3つの越屋根が並ぶ2階建ての家屋が現れた。これが明治時代に養蚕法の改良と普及に取り組んだ高山社の発祥地である高山社跡だ。高山村の名主だった高山長五郎は、貧しかった村民が収入を得る方法として養蚕に取り組み、養蚕法「清温育」を開発した。

その養蚕法は、通風と温湿度の管理によるところが大きい。1891（明治24）年に建てられた主屋には、これを行うための工夫が凝らされている。

蚕室は2階だ。蚕を飼育する蚕カゴを床から天井まで重ねて収容する蚕棚が設けられ、その下は1階からの空気が入ってくるように通気口が開いている。上部は「コマガエシ」と呼ばれるスノコ状の天井になっており、越屋根の天窓を開けると、暖まった空気が自然に抜けるようになっている。また、温湿度計とともに暖炉や火鉢も備えており、その日の気象条件や蚕の成長段階に応じて、温度や湿度をコントロールできるようになっていた。

高山社は養蚕の教育機関も設立し、全国から集まる生徒にその技術を指導した。日本の絹産業は、質の良い絹を世界に向けて大量に供給することに成功したが、その元となったのが高山社のような組織だった。

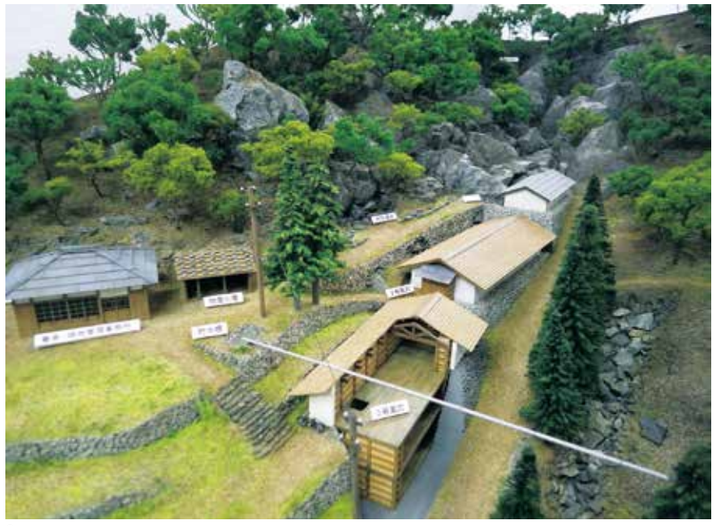
「やぐら」と呼ばれる越屋根には自然換気を可能とする開口が

高山社に先駆けて、養蚕法の発展に寄与したのが、幕末から明治にかけて養蚕技法「清涼育」を確立した田島弥平だ。その旧宅は利根川がすぐ脇を流れる伊勢崎市南部に位置する。1863（文久3）年に建てられた主屋は、養蚕に適した建物とするべく改良され、近代養蚕農家の規範となった。

考え方は高山社跡と共通している。棟部の越屋

高山社跡の2階蚕室。蚕の生育に適した温湿度管理と通風を可能にした空間がつくられている。蚕棚の下にある通気口から空気が入り、上はスノコ天井を通して越屋根から空気が抜ける。蚕の飼育が「天の虫」と言われるほど当たりはずれの多かった時代に、収繭量の安定と品質を格段に進歩させた

1



2

1　荒船風穴の遺構。地元の養蚕農家・庭屋静太郎（にわやせいたろう）が私財を投じて建設したもので、静太郎の息子・千壽が、高山社蚕業学校※在学中にこの場所に注目し、蚕種貯蔵に有望な地であると父に報告したことからはじまる。1号、2号、3号の風穴があり、岩の隙間から出てくる冷風を利用して、蚕の卵（蚕種）を貯蔵。孵化の安定化と時期調整が可能となり、繭の増産に貢献した。3基の貯蔵施設跡からは、現在でも操業当時と変わらぬ冷風が吹き出し続けている。世界遺産構成資産

※1901（明治34）年に高山長五郎の遺志をついだ町田菊次郎によって開設された教育機関

2　操業時の荒船風穴周辺の様子を再現したジオラマ。石積みの上に壁と屋根を架け、貯蔵を行っていた［所蔵：下仁田町歴史館］

根をこのあたりでは「やぐら」と称している。2つか3つに分けて「やぐら」を設ける例もあるが、この建物では端から端まで連続した「総やぐら」となっている。内部は幅が約1.8m、高さが約2mの空間が続いており、その中を歩きながらハイサイドライト状の引き戸を開けていくと、自然換気が可能となる。この仕組みを利用して、2階蚕室の温湿度を調節し、蚕の成育に適した環境を生み出して、毎年安定した繭を取れるようにしたというわけだ。

岩の隙間から出る冷風を利用した天然の冷蔵庫

一方、荒船風穴は群馬県の西側、下仁田町の山間部にある。ここには1905（明治38）年から1935（昭和10）年ごろまで、蚕の卵を冷蔵する施設があった。

温度を下げると、蚕の卵は孵る時期が遅れる。従って冷所に貯蔵して出す時期を調整すれば、元々は春から秋にかけて年に1回か2回のサイクルしか行えなかった養蚕が、3回以上行えるようになる。この方法をとることで、生糸の生産量は格段に増大したのである。こうした貯蔵施設は国内にいくつかあったが、ここは随一の規模を誇り、関東近県はもちろん、全国から蚕の卵を預かっていた。

蚕の卵を冷やすのに使われるのは、ここでも自然のエネルギーだ。風穴があるのは日が当たりにくい斜面地の下で、降った雪は春まで溶けずに残る。斜面を形づくっているのは玄武岩が崩れてできた層で、これが冷却媒体となって、石と石の隙間に流れる空気が冷やされ、冷風が下に落ちてくる。その温度は最も高くなる秋でも摂氏4度ほど。これを溜め込んで、天然の冷蔵庫としたというわけである。

現在は石積みが残るだけだが、かつてはその上に3棟の建屋があった。貯蔵庫の内部は、真夏でも寒いほどで、作業員は分厚い上着を着込んで作業していたという。

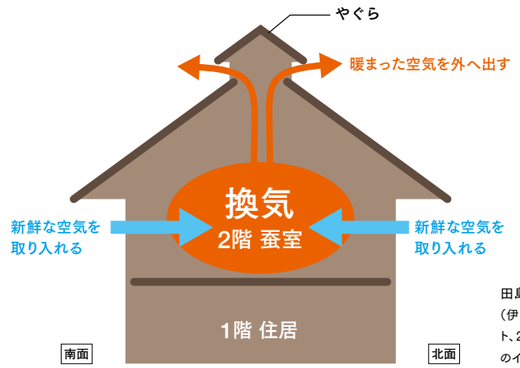
世界各地に生糸を輸出するには、大量生産に応じられる製糸工場が稼働するだけでなく、原料をつくる蚕の成育技術が欠かせない。そのカギとなったのが、これら自然を活かした環境建築のつくり方だった。

こうした幕末・明治期から確立されていた室内気候のコントロール技術は、建築環境の専門家から見てどうとらえられるだろうか。日本大学短期大学部建築・生活デザイン学科の元教授である吉野泰子氏に聞いてみた。吉野氏は、東京・世田谷区の次大夫堀公園民家園内にある旧加藤家について、温熱・空気環境の実態を調査した[01]。旧加藤家は幕末に建てられ、明治期に改修された養蚕農家で、田島弥平旧宅や高山社跡と同様に、換気のための越屋根を備える。熱画像カメラや熱電対などを用いた計測と、コンピュータによるシミュレーションを行った。すると越屋根による換気が効いており、茅葺の燻蒸効果は保持しつつ、空気質の悪化防止にもつながっていることが明らかになった。

「養蚕型住宅に見られる先人の知恵と工夫は、現在の工学的な観点から見ても興味深いものです。地球環境問題への対策が強く求められている今、その意義を再び多くの人に知ってもらいたい」と吉野氏は言う。

田島弥平旧宅、高山社跡、荒船風穴の3施設は、質の良い絹を世界に向けて広めた拠点としての価値だけでなく、建築におけるパッシブデザインの先駆けとも言える建物群だ。富岡製糸場からそれぞれ少しずつ離れているが、見に行く価値は十分にあると言える。

3



田島弥平旧宅の蚕室換気の仕組み
（伊勢崎市「田島弥平旧宅」パンフレット、2018年1月発行より、換気システムのイメージ図を参考に作成）

3　田島弥平旧宅。伊勢崎市境島村地区は、江戸時代中期から蚕種製造の盛んな地域で、田島弥平家も有力な蚕種製造農家だった。弥平は各地の養蚕方法を研究し、蚕の飼育には自然の通風が重要であると考え「清涼育」を体系的に完成した。見学可能範囲は庭と桑場までで、内部は原則として非公開。近くに建物を解説する案内所がある。国指定史跡、世界遺産構成資産

01　「旧加藤家主屋における温熱環境及び空気質に関する委託研究報告書」2006.10.18

磯 達雄　いそ・たつお
建築ジャーナリスト／1963年埼玉県生まれ。1988年名古屋大学工学部建築学科卒業。1988–1999年日経アーキテクチュア編集部に勤務。2002年よりフリックスタジオ共同主宰。現在、桑沢デザイン研究所および武蔵野美術大学非常勤講師。

富岡 建築めぐり
TOMIOKA

参考
- 今井幹夫『富岡製糸場と絹産業遺産群』KKベストセラーズ、2014
- 富岡市内の文化財（http://www.city.tomioka.lg.jp/www/genre/0000000000000/1001050000522/index.html）2018.12.18アクセス
- 「世界遺産富岡製糸場」（http://www.tomioka-silk.jp/tomioka-silk-mill/）2018.12.18アクセス
- 文化庁 国指定文化財等データベース（https://kunishitei.bunka.go.jp/bsys/index_pc.asp）2018.12.18アクセス

おことわり
04–21ページの作品名称は文化財指定名称とし、ほかは原則として2018年11月時点の施設名称を使用しています。

高崎を起点とする上信電鉄上信線の中程に位置する富岡は、痩せた土地柄で江戸時代初期に新田開発で生まれたまちだ。信州寄りの南牧村で産出する砥石の中継地として整備され、絹の市が立っていた。また、幕府の天領であり、代官の陣屋も建つ予定だったが実施されず、明治まで預かり地として残っていたその土地に富岡製糸場が建設された。

製糸場の北東が中心市街地だ。そこは工女の娯楽施設である劇場や映画館、飲食店のある遊興エリアであったが、2002年に土地区画整理事業が認可。空き地が現れ、まちが変わり始めた。その矢先の2003年、絹産業遺産の世界遺産登録を目指すプロジェクトがスタート。まち並み保全へ舵を切り、先の区画整理事業は廃止された。2014年、ついに製糸場が世界遺産に登録される。それにあわせてコンペが実施された駅舎や市庁舎などの主要施設は必見だ。カフェやレストランに再生された歴史的な建物を探すのも面白い。歴史の評価や利活用はまだまだこれから。世界遺産登録は確実にまちの風景を変えている。

世界遺産は製糸場だけでなく、養蚕農家、養蚕学校、蚕種保存施設も含まれ、それらは長野県境から埼玉県境まで広く点在する。絹産業の広がりの証で、今回めぐるエリアは少し広い。高崎、前橋にも名建築が多いが、それはまた別の機会にめぐろう。

写真｜小松正樹（特記以外）

01 ▶p.16参照
荒船風穴
竣工｜1905年（1号風穴）、1908年（2号風穴）、1914年ごろ（3号風穴）
甘楽郡下仁田町南野牧屋敷甲10690–2外

02 ▶p.14参照
高山社跡
竣工｜1891年
藤岡市高山237

03 ▶p.17参照
田島弥平旧宅
竣工｜1863年（主屋）、1894年（桑場）、1883年（種蔵※再建）
伊勢崎市境島村甲2243

04
旧茂木家住宅（もてぎ）
竣工｜1527年
移築・保存｜1977年
富岡市宮崎329
戦国時代の大山城城主の末裔とされる茂木家の住宅。板葺石置屋根、古代の掘立柱建築様式に通じる棟木や母屋にまで達する巨大な柱、不揃いな曲がり材を使った梁、柱の手斧の力強い仕上げが目を引く。建物は、大きな改造を受けてはきたが、現存する民家の中で国内最古の建物のひとつと言われる。もとは、富岡市神農原にあったが、1977（昭和52）年に現在の宮崎公園内に移築。保存修理のうえ一般公開されている。重要文化財

05
旧一ノ宮町役場庁舎（現・富岡市シルバー人材センター）
設計｜不詳
竣工｜1928年
増築｜1950年
富岡市一ノ宮1353–1
建設当時としては数少ない鉄筋コンクリート2階建ての建物。外観は装飾が少ない国際様式でまとめられ、内部もほぼ建設当初のままの姿を今に残す。寄棟造・瓦葺屋根の木造3階部分は、防水のため1950（昭和25）年に陸屋根の上に増築された。1954（昭和29）年まで役場庁舎として使用され、その後、市の出張所、群馬県立博物館などを経て、1998（平成10）年より市のシルバー人材センターの拠点となり現在に至る。登録有形文化財

06
一ノ宮貫前神社（ぬきさきじんじゃ）
創建｜531年
竣工｜1635年（現在の社殿）
富岡市一ノ宮1535
上野国の一の宮。参道を上ると総門に至るが、社殿はそこから石段を下った低地にある登って下る珍しい形式をもち、「下り参道」「下り参りの宮」と呼ばれる。現在の社殿は、徳川家光の造営。5代将軍・徳川綱吉による大掛かりな修理を経て今日に至る。漆塗り、極彩色の華麗な江戸初期の造りを今に伝える。年間祭儀が71回もあり、古くからの祭儀が数多く残る。重要文化財（本殿、拝殿、楼門）

07
富岡市社会教育館
設計｜大江國風建築塾
竣工｜1936年
富岡市一ノ宮1465–1
設計は、明治神宮宝物殿などを手掛けた大江新太郎主宰の大江國風建築塾。玄関・事務室棟正面入り口の車寄せや式台、雁行型の建物の配置、庭園、書院造や数寄屋造など、伝統の技術と建築要素が各所に採用された大規模な建築。昭和天皇の行幸を契期に、精神修養の場として官民一体となって建設され、2005（平成17）年に富岡市に移管。現在は、市民の文化活動の場として活用されている。登録有形文化財（講堂棟・玄関及び事務室棟・講師室棟・和室棟・正門）

08
北甘(ほっかん)変電所
設計｜不詳
竣工｜1919年
富岡市一ノ宮
現存する鉄筋コンクリート造の建造物の中では、群馬県内で最古級とされる。建設後、当時の富岡町ほか26カ町村、8,422戸へ電力を供給し、富岡製糸場の電化にも寄与した。水平屋根、縦長窓や半円窓を多数配置した外観デザイン、内部のループ状の階段が特徴で、現在も現役の変電所として稼働している。普段は内部の見学不可。登録有形文化財

09
富岡市立美術博物館・福沢一郎記念美術館
設計｜柳澤孝彦＋TAK建築・都市計画研究所
竣工｜1995年
富岡市黒川351–1
周囲の山並みとの調和を図ったヴォールト屋根をもつ、富岡市の郷土資料の展示と、郷土ゆかりの作家の美術作品の紹介を行う美術博物館。富岡市出身の画家・福沢一郎を顕彰・記念する記念美術館を併設している。細長い平面を連鎖状に並べた構成によって、空間の奥行き感を深めている。内部のトップライトやスリットから入る自然光も印象的

10
群馬県立自然史博物館 かぶら文化ホール
設計｜内井昭蔵建築設計事務所
竣工｜1996年
富岡市上黒岩1674–1
円形の文化ホールと、三角形の断面をもつ博物館からなる建築。自然の歴史を含んだ土壌と地層、山に着目し、「土」を基本コンセプトに、博物館外壁の断面側には、岩石と土を交互に積み上げた地層の表現が試みられている。山を表現した斜めの屋根も特徴的。博物館とホールは、円形の中庭で結びつけられ、独立性を保ちながら一体利用も可能

11
群馬県立富岡高等学校
御殿・黒門（旧七日市藩陣屋正殿・中門）
竣工｜1616年
再建｜1843年（御殿、中門）
富岡市七日市1425–1
七日市藩は、加賀藩前田利家の五男・前田利孝を藩祖とする約1万石の小藩。そのため城ではなく陣屋を築いた。現在の富岡高等学校の敷地が、その陣屋跡にあたる。陣屋は建設後、3度の火災にあい、現在残る「中門」と、陣屋の中心となる正殿の一部「御殿」は、1843（天保14）年に再建され、近年、現在の場所に移築。中門は、本家の加賀藩前田家の赤門（東京大学赤門）に対して「黒門」と呼ばれる。ともに登録有形文化財

12
山名八幡宮
改修設計｜永山祐子（授与所・社殿・神楽殿）
創建｜1175–77年
改修｜2016年
高崎市山名町1581
「安産と子育ての宮」として知られる神社。神社を「祈りの場」としての役割に加え、「集いと活動ができる場」としてリニューアル。社務所だった建物は、お守りなどの授与所として周囲の緑に溶け込むガラス張りの空間へ、神楽殿と江戸時代中期に再建された社殿は、建物はそのままに、天井の蛍光灯や装飾を取り外す「引き算」によって空間を編集し直した。境内には、カフェやパン屋、公園なども設け、放課後デイサービスなどソフト面での活動も活発。「神社から広がる地域再生」の取組みとして、2017年グッドデザイン賞を受賞［写真右上：編集室］

13
mico(ミコ) café(カフェ)
改修設計｜飯山千里建築設計事務所
竣工｜1970年ごろ
改修｜2014年
高崎市山名町1510–1
山名八幡宮の神職・高井氏が、子育ての孤立化・悩みを緩和するために始めた親子イベントをきっかけにオープンしたキッズ・マタニティカフェ。山名八幡宮境内の結婚式場として使われ、その後、物置となっていたスペースを改修して活用。室内からは山門を望める。カフェの運営には、近隣の母親たちがあたり、一角では親子ヨガやアロマ教室が開催されている

14
PICCOLINO(ピッコリーノ)
改修設計｜飯山千里建築設計事務所
竣工｜不詳
改修｜2016年
高崎市山名町1579–4
天然酵母のパンをつくる職人夫婦との出会いがきっかけとなりオープンしたパン屋。境内の空き家を店舗兼厨房に改修。外観は2階建てだが、機器の設置や排熱を考慮し、1階の天井は抜いて吹き抜けに。撤去した天井材を、棚やカウンターに再利用している。新たに付加する要素を抑え、パンの力強さを感じさせるシンプルな空間とした。夫婦は当時、高知に店を構えていたが、群馬県出身という縁があり、出会いから半年後に帰郷して店を開くに至った。JCDデザインアワード2016銀賞

15
日本基督教団 甘楽教会
設計｜不詳
竣工｜1954年
富岡市七日市1168
富岡製糸場にゆかりの深い教会。1878（明治11）年に設立された安中教会（現・日本基督教団安中教会）の信徒の伝道により、1884（明治17）年に創立。現在の大谷石造りの礼拝堂は、1954（昭和29）年に建設された。旧礼拝堂も製糸場の近くにあり、製糸場の創業当時には日曜ごとに教会に通い、洗礼を受ける工女もいた

16 ▶p.07–08、p.10参照
富岡製糸場
設計｜オーギュスト・バスティアン
（繰糸所・東置繭所・西置繭所）
竣工｜1872年
富岡市富岡1–1

20 ▶p.06参照
富岡商工会議所会館
設計｜手塚貴晴＋手塚由比＋矢部啓嗣／手塚建築研究所
竣工｜2018年
富岡市富岡1121–1

17
上毛新聞社富岡支局
（旧・肥留川医院）
設計｜不詳
改修設計｜高橋喜美
竣工｜1930年
改修｜2013年
富岡市富岡45–1
富岡製糸場正門へと続く道沿いに立つ、切妻屋根と窓が特徴の洋館建築。約20年前まで開院していた。現在は建物の一角に上毛新聞社の富岡支局が入る。開局にあたり、外壁や建具を丹念に補修し、往時の医院の姿を取り戻した。支局では、富岡製糸場の錦絵や県内絹遺産の紹介映像、記事スクラップを公開。ギャラリーとしての機能ももちあわせている。市認定の景観重要資源

18
江原時計店
設計｜不詳
竣工｜1931年
富岡市富岡1029
製糸場近くの交差点に立つ、創業1912（明治45）年の時計店。現在の建物は、消防団の詰所として建てられたもので、最上階の六角形の望楼は、その名残り。1階は消防車の車庫、2階は休憩所として使われていた。昭和30年代には電気屋も経営しており、店頭に街頭テレビを設置したところ警察から指導されたほど見物人が集まったという

19
IL.(イル・ピーノ) PINO
設計｜不詳
改修設計｜馬場俊人＋原人社
竣工｜1950年ごろ／改修｜2015年
富岡市富岡1041
店舗併用住宅を改装したイタリアンレストラン。店主の馬場俊人氏は、かつて多くの人で賑わっていたという建物の来歴に注目し、「再び人が集う場所にしたい」と郊外からこの場所へ移転してきた。地元の若者らと隣接する緑豊かなポケットパーク、通称「お富ちゃん広場」を活用したイベントを企画するなど、富岡のまちづくりにかかわる人々の交流の場づくりにも取り組む

24
Trattoria(トラットリア) e bar IL(イル) Girasole(ジラソーレ)
設計｜不詳
改修設計｜原田耕一＋空間開発＋岩井工建
竣工｜1953年
改修｜2012年
富岡市富岡1757–1
旧銀行支店長社宅を改築したイタリアンレストラン。沼田市から移転してきた店だが、用地に残っていた既存建物の魅力を見出し、建替えせずに流用した。欄間などの造作は残しつつ、天井や壁を撤去してフロアを確保。腕利きの左官職人(ゾウ)が随所に仕上げた壁いっぱいの鏝絵(こてえ)も見どころ［写真：編集室］

25
富岡市講堂（旧・富岡尋常高等小学校講堂）
設計｜不詳
竣工｜1933年
富岡市富岡1359
富岡尋常高等小学校の講堂として建設された木造平屋建ての建築。同校体育館と仮校舎として使われたほか、地域に開放され各種行事に利用されてきた。正面のポーチから玄関は、アーチを連続させた開口部をもつ左右対称の洋風の構成で、その奥の講堂部分は小屋組がキングポストトラス構造の近代和風建築。現在、利用を中止しており、内部は非公開。登録有形文化財

21 ▶p.12参照
富岡市役所
設計｜隈研吾建築都市設計事務所
竣工｜2018年
富岡市富岡1460–1

22 ▶p.09参照
富岡倉庫
設計｜不詳
改修設計｜隈研吾建築都市設計事務所
竣工｜1901年ごろ（1号・3号倉庫）、1923年ごろ（2号倉庫）、1903年ごろ（乾燥場）
改修｜2020年予定（1号倉庫）、2021年予定（2号倉庫）、2019年予定（3号倉庫）、未定（乾燥場）
富岡市富岡1450

23 ▶p.11参照
上州富岡駅舎
設計｜武井 誠＋鍋島千恵／TNA
竣工｜2014年
富岡市富岡1599–3

26
日本料理ときわ荘
本館・土蔵・長屋門
（旧・櫛渕家住宅主屋・土蔵・長屋門）
設計｜大江國風建築塾（伝承）
竣工｜1938年
富岡市富岡1729–1
地元の資産家が老後を過ごす別宅として建て、1961（昭和36）年に現在の持ち主が取得。現在は日本料理店として活用されている。主屋は和風平屋建ての雁行配置。随所に銘木材が用いられ、細部意匠の納まりもきめ細かい。赤味を帯びた瓦も特徴。増築された厨房以外は、創建時の姿を残す。主屋、土蔵、長屋門ともに、登録有形文化財